

ア、高いやら、安いやら自腹切つて飲みに通つたことはありませんから分りません』ヤツ、分らぬのは尤もだ、安うするか、彼方の仲居にお袖と云ふのがあるが知つてやらう』知りません私しやア』馬鹿言へ、此の街道に働いて居て分銅屋のお袖を知らんことがあるか』あるかと云ふて私しやア知りません』ア一途方もない妙やなア、色の白い鼻の處にバラ／＼と痘斑がある彼の痘斑が愛嬌になるぞなア分つて居るやらう』イエ分りません』分らぬ、何うして分らぬのやらう、ソレ河内の佐山の産で』知りませんがな私しや』父は治右衛門と云ふて是れも善い人やつたがな、是れだけ言うたら想ひ出すやう』皆目知りません』甚い難儀ぢやなア』イエ貴方より私の方が難儀でやす』アノお袖なア、分銅屋に居ることを知らんがな、不圖乃公の顔を見るなり、オヤ旦那様御機嫌宜しう、何うぞ此方へ、お前誰れやつたいなアと云ふたら、妾しやア佐山の治右衛門の娘の袖でござります、ア、是りやアお袖坊か、ヤア豪い奴ぢや……』オイ甚い難儀なことになつて來たぞ、急に埒ア明んぜ』十二三の時分に見た儘ぢや、今年二十一になつて居ると云ふ娘ツ子が、ガラリと子供から大人に變つたのや見違へるなア、お前、小父さんと言ふたのが當時仲居をして居るので旦那様と言ひ居る、可愛いものぢやないかいな、彼のお袖知つてるぢやらうがな』イエ知りません居ますか』エツ一遍尋ねたかいな、纏頭遣りまして總計一兩一分、値打もある、なか／＼安い／＼ハ、ア、嘘ぢやと思つて居るな』イエ左様なこと思つて居りません』阿呆言へ、居まさんてお前、口で言うて居るが、心では思

つて居るやらう、一兩一分の證據物見せて遣るサツ……此の通りチャンと竹の皮に包んである、コレ料理屋へ物を食ひに行つて、食ひ残して戻るのぢやないぜ、残つたら残らず包ませて持つて歸るが宜い、残して置くと、ハ、ア、氣に適らなかつたかいなと氣を遣い居るア、一甚い旨い、家へ土産に持つて遣る、包んでと言ふと先方も心持ちよう嬉しい、此方も見榮を張つて残して置くにや及ばぬ、なア、ソレ是れが玉子の巻焼車蝦の鬼焼、烏賊の鹿の子焼やき／＼つて云ふ奴ぢやなア、家へ土産と思つて包ませたが、其處の何方なと一つ宛遣るからコレ食へ』イエ最う結構でございます』結構でございますつて何が結構ぢやい』阿呆、遣ると仰しやる一つ貰へ』だつて彼様な泥酔漢薄汚ない』ナニツ……』イエ何も申して居りません』イヤ言うた、乃公エ酒に酔うて居ても聾者と違ふ能う聞える、薄汚ないと言ふたな汝りやア、薄汚ない者が一枚一兩一分も使ふかい、然う云ふ汝りやア冥加なことを知らん人間ぢやよつて、何時までも往來傍でへエ駕籠と、宛るで尻で死んだ亡者のやうに吐して居るのぢや、コレ、あんじよ包め』ソレ見い、色々なことを爲せられるわい』コリヤ呟かんとせえ』へエ……へエ……包みました』コリヤ何と言ふ包み様ぢや、巻焼が溢れか／＼つて居る、他人の物ぢやさかひつて左様な不親切なことがあるか然う云ふ人間ぢやと何うせ頭が上らぬ、巻焼をあんじようしぼつて置けと言ふたのに、矢張り汗があるわい、ハ、ハ、妙なもので錢使うても何ぢやなア、割合に安いと思ふと心持が宜いなア、纏頭を遣つたりしたのは、夫りやア此方が承知で遣つたのぢや、